

封鎖から窒息へ/米の対キューバ戦争が最も残酷な段階に入る

トランプ米大統領は1月29日、キューバをアメリカの安全保障にたいする「尋常でない異常な脅威」と宣言し、同国への封鎖を強化した

マノロ・デ・ロス・サントス
ピープルズデスパッチ 2026年1月31日

[From blockade to asphyxiation: the US war on Cuba enters its most brutal phase : Peoples Dispatch](#)

ハバナの夜の静けさの中で、遠くの病院での発電機の低い音と、ろうそくの灯の周りに集まった家族のざわめきだけが聞こえる。彼らにとって「米国の国家安全保障」は、アメリカのケーブルニュースで議論される抽象的な概念ではない。それは20時間の停電と腐った食べ物の臭い、そして冷蔵庫の中の子供の薬は大丈夫かという不安な現実だ。これがアメリカ政府が「異常な脅威への対応」と呼ぶ政策の素顔なのだ。しかし、真の脅威は軍事的なものではない。それは、67年間にわたり主権の放棄を拒み続けてきた小さな島国の挑戦なのだ。

2026年1月29日、トランプ政権は長年の圧力キャンペーンを窒息という鈍器へと変えました。大統領令により、メキシコなどキューバに石油を売る国々に対して、関税を課すことにした。これはもはやキューバの人々を半球の他の地域から隔離・封じ込めることではない。これは経済的窒息を目的とした意図的な戦略であり、冷戦以来みられなかった動きである。

窒息の仕組み

キューバの電力網、水ポンプ、公共交通機関、病院、学校は輸入燃料で動いている。第三国を強制することで、アメリカは単に制裁を課すだけでなく、その

国の代謝そのものを妨害しようとしている。キューバ政府の声明は核心を突いていた。これは「恐喝、脅迫、直接的な強制」であり、燃料の流入を阻止するためのものだ。その結果、集団的処罰が生まれ、飢餓、闇、病気を政治的武器として利用し、国民の意志を打ち碎く国際法違反となっている。

絶え間ない戦争：アイゼンハワーからトランプまでの帝国の戦術書

これを「外交政策」と呼ぶのは、その性質を過小評価するものだ。それは進化し続ける多国間の戦争手段であり、10期連続のアメリカ大統領が一つの目的、すなわちキューバの社会主義プロジェクトの破壊を執拗に追求してきた。

- アイゼンハワー(1960年)は、キューバが米国所有の製油所を国有化した後の最初の封鎖で侵略を開始した。
- ケネディ政権(1961-1962年)はピッグス湾侵攻の失敗でエスカレートし、全面封鎖を行い、キューバ指導者への暗殺未遂を含む秘密計画「モンゴース作戦」を承認した。これにはフィデル・カストロに対する630回以上の暗殺未遂も含まれまる。
- クリントン(1992-1996年)は、ソ連崩壊後に「決定的な一撃」を期待され、トリチエリ法とヘルムズ・バートン法を成立させた。これらの法律は米国の封鎖を域外まで拡大し、キューバとの貿易を行う外国企業を罰し、世界商取引に米国の権限を行使した。
- トランプ(2017-2026年)は、オバマ政権下でからうじて緩和された方針を転換しただけでなく、さらに残酷さに深めた。キューバを「テロ支援国家」リストに再び加えた。これは政治的虚構として広く非難されたが、243件の新たな制裁を課した。彼は最新の行動として2026年の大統領令を出し、島のエネルギーを断ち切ることでその運命を決定づけようとしている。
-

この戦略の意図は常にあからさまにされていた、機密解除された国務省のレスター・D・マロリーによる1960年のメモは、「資金と物資の遮断」によって「飢餓、絶望、政府転覆」を生み出すことを提唱していた。重要なのは犠牲者をだすことであり、副作用ではない。

「残酷なジレンマ」と人的犠牲

この仕組まれた危機は数字で計測でき、結果は恐るべきものだ。1990年代までの封鎖強化により、カロリー摂取量は40%減少し、結核による死亡者数は48%急増した。現在では、医療用人工呼吸器や浄水用の予備部品、そして何よりもそれらを動かす燃料の購入が妨げられている。

この苦しみは必要な犠牲なのだと、米国議会に所属するキューバ系アメリカ人マフィアのメンバーは指摘している。フロリダ州選出のマリア・エルビラ・サラザール下院議員は最近、次のように述べて冷酷な計算を示した。「母親の飢え、即時の助けを必要とする子どものことを考えると、胸が締め付けられます…しかし、それこそが私たちが直面している残酷なジレンマなのです。短期的な苦しみを和らげるか、キューバを永遠に解放するか」

この約束された「自由」は、1959年以前の過去への回帰であり、当時はアメリカ企業がキューバの公共事業の80%と耕作可能な土地の70%を支配していた。それは一世代全体を計算づくで苦しめて買い取った「搾取の自由」だ。

「ドンロー・ドクトリン」：解き放たれた帝国主義

トランプによるエスカレーションは、彼の「ドンロー・ドクトリン」の礎であり、1823年のモンロー・ドクトリンを21世紀に復活させたもので、ラテンアメリカとカリブ海全域をアメリカの所有物と宣言している。2026年1月3日のベネズエラへの違法攻撃の後、トランプは率直にこう述べた。「西半球におけるアメリカの支配は二度と疑問視されることはない」。この教義の下では、特に世界的に有名なキューバの医療制度のように人間のニーズに合わせて経済を組織する独立した道を選ぶ国は「国家的緊急事態」と見なされる。

海外戦争と国内戦争

アメリカ国民にとって、これを遠い問題としてではなく、繋がった論理の一部として捉えることが重要だ。キューバ経済を締め付けるために「国家非常事態」を発動する政権は、その「非常事態」を利用してICEによる米国の都市を急襲し、レニー・グッドやアレックス・プレッティのような自国民を殺害して

いる。自決権行使する 1100 万人のキューバ人に集団的脅威のレッテルを貼る同じ考え方で、国内の移民や少数派を脅威と呼んでいる。封鎖の論理と国境の論理は同一なのだ。人口と資源を暴力で支配し、人間集団全体を使い捨てにすることである。

ハバナの家に灯る揺らめくろうそくは、闇に対する光以上のものだ。それは帝国の命令に対する反抗である。キューバ国民が灯りを保つための闘いは、支配と安全を混同し、残酷さを力と誤解する帝国の強制から解放され、すべての民族が自らの運命を決定する権利を求める根本的な闘いなのである。過去と同様に、キューバ人は団結して挑戦に立ち向かい、生き残るだけでなく封鎖を乗り越えるだろう。

筆者のマノロ・デ・ロス・サントスは、ピープルズ・フォーラムの事務局長で、トリコンチネンタル社会研究所に所属。論考は『マンスリー・レビュー』『ピープルズ・ディスパッチ』『カウンターパンチ』『ラ・ホルナダ』などの進歩的メディアに定期的に掲載されています。最近では『Viviremos: Venezuela vs. Hybrid War』(LeftWord, 2020 年)、『Comrade of the Revolution: Selected Speeches of Fidel Castro』(LeftWord, 2021 年)、『Our Own Path to Socialism: Selected Speeches of Hugo Chávez』(LeftWord, 2023 年)を共編した。

【翻訳チェック 田中靖宏】